

編纂者まえがき

一般社団法人白川学館

本書（全三巻）は、当学館の学びの中心にある「被い」「鎮魂」「言霊」の三つの主題を、より多くの向学心に富む諸氏へお伝えすることにより、実践とともに伝承されてきた日本古来の無形の文化的財産が、これからの新しい社会を創造する契機となることを願い、編集されました。

収載されている講話は、当学館の創立者であり代表を務める七澤賢治の講話録（当学館の会員サイト「和学教授所」に原文を所収）の中から、編集者の責任において、先述した三つの主題に沿うと思われる内容を抜粋し、講話者の意図と、講話ならではの語り口から醸し出される味わいを可能な限り損なわず、同時に、書籍としての時の研磨にも耐えうるようにとの配慮から、編集を加えたものです。

全三巻は、第一巻を「被い」、第二巻を「鎮魂」、第三巻を「言霊」として、主題ごとに構成し、さらに深く学びを得たい諸氏の便宜をはかるため、巻末に、当学館のHP内にて検索できる各講話原文の所在地等の参考資料を添えました。

読者諸氏にとって、本書との出会いがより深い学びの世界への誘いとなり、同時に、日々新たな自己を創造するきっかけとなりますようにと編集者一同念願しております。

令和三年初春 編集者 記

目次

編纂者まえがき

1

1 一被いとは

8

2 一なぜ被いが必要なのか

51

3 一被いをするに見えてくるもの

86

4 一被いの極意

111

5 一被いはめぐる

175

6 一被いの意識進化へ

211

巻末資料

1 一白川伯王家伝承被詞

244

2 一本書で登場する神

248

3 一 百神一覧

250

4 一 初出一覧

254

5 一 吹き送り大被祝詞構文

262

著者プロフィール

270

七澤賢治講話選集 一 祓い

祓いとは

1

自分自身の音色を聞く

父韻と母音が結び合って子音になる。我々は、その子音を聞きながら、音色を自己自身に返して、自己返照して自分自身の音色を聞くわけです。

あるいは、そのときに合わさった言葉や役割を聞くということが本来の神示です。お祓いをするということは、自分自身の仏教的・宗教的にいうところのカルマのようなものを確認することから始まるわけです。私は七十歳の頃、自分自身の音色が少し分かってきましたけれども、皆さんも自分の声の中に嫌なものや、辛いものなどがあるわけです。その悲喜交々が入り込んでいっ

て声になるわけです。それを嫌と思わないで聞く。

それを客観視して、自分の今の状態を知っていくということが、まずは大切だと思えます。その上で自分自身の音色が、神の宇宙創造意志に近づき、そういうものを迎えられるような言霊を使って表現していくことができるようになる、ということがひとつの客観視だと思えます。毎日、お祓いをするとき、自分自身の声を聞くことで、そういうことにつながるのだと思えます。

一回一回の祓いの中に必ず新しい発見がある

白川は祓いに始まり、祓いに終わると言いますけれども、たとえばそれは書道家が死ぬまで毎朝、毎日、自分の筆で練習することに通じていると言えます。我々も祓いというものがとてつもなく深いというか、ここにいらっしゃる皆さまより歳を重ねてきた私の言葉で言うならば、限りなく追求する道があるとい

うか、毎回毎回、お祓いをあげながら発見があったという想いをさせていた
いているということをお伝えしておきたいと思うんです。漫然とお祓いをあげ
ているということではなくて、必ずその中に新しい発見があるということであ
ね。

たとえば、大祓が千年前の古い言葉であっても、その言葉の一音一音に深い
意味がありますから、現代の中で活かせるものを我々は得られるようになって
いるのですね。ですから、大祓をしっかりと一音一音唱えていくことによって、
そして、その深い意味を掴むことによって、とてつもない境地が開けることが
あるんだということをお伝えしておきたいと思っています。そういうことも解
釈とお伝えできれば皆さまの励みにもなると思います。決して、漫然とし
たものではないということです。一回一回の中で、ひとつの掴みどころがある
ということをお伝えしておきたいと思います。

それは創造の始まりからの壮大な神話

お祓いというのは創造の始まりからの壮大な神話であり、宇宙論を言葉で
言っているわけですから、我々の祓いというのは、全部、創造の始まりから維
持、帰趨ききうというか、綺麗に戻していく方法論の壮大な神話であるのです。宇宙
論を言葉で発しているのです。それを音や光、文字で表すというのはなかなか
難しいものなのです。

先日、日本ではあまり知られていない柴田南雄※という人の交響曲『ゆく
河の流れは絶えずして』をやっていましたが、曲の後半では、鴨長明の『方丈記』
を歌っているわけですね。ベートーヴェンなんかも、第九では、最後の楽章は
合唱にしていますが、そうですね、柴田南雄の交響曲は、たぶんヨーロッパで
は受けないと思います。サントリーホール全体を使って合唱をするんですけれ
ども、見ていると観客が、全然、分からないようでした。感動しないんですね。「ゆ

※柴田南雄

1916～196年。東京生まれ。戦後日本の現代音楽界を代表する音楽家として、作曲、音楽評論、音楽学の分野に大きな足跡を残す。1992年文化功労者に選出された。さまざまな音楽様式や手法が織り込まれた交響曲「ゆく河の流れは絶えずして」(1975年作曲)は柴田の集大成といわれる作品。混声合唱と朗読によって鴨長明の『方丈記』の世界が表現される後半の第6～8楽章では、ステージから客席まで劇場空間全体を使って演奏される「シアターピース」の手法が用いられている。2016年に27年ぶりに全曲再演され話題を呼んだ。

く河の流れは絶えずして……」といくら訴えてもその境地なんか全然分からな
い。ただ、綺麗な音ということで聴いているだけだと思いのですけれども。そ
れでも、柴田南雄が作曲した交響曲が日本語の歌となる。それは我々としても
参考になります。

我々には、その世界が見えましたがけれど、サントリーホール全体で、大祓が
あがっていったときに、どんな感動をするのかなと見ていましたが、要するに
一番の根っこにあるのは、そういう言葉という物語、鴨長明の『方丈記』の物
語を伝えたいということなんでしょうね、やはり物語というものが、これから
の時代の中で一番必要なものということを感じました。しっかりと自分自身と、
自分自身の先祖である遠津御祖神とつみおやのかみと書いていますが、それを辿った道ですね。
そこに物語を感じないと。だから、そういうものは架空でも、仮説でもよいか
らつくってもよいわけですね。それは自分自身が、自分自身の家を大切にす
るというか、一体となるというような物語です。国というものが生まれた、神武

天皇の物語ということですね。

今、天皇という存在や、古神道、鎮魂というものが持っている役割でやって
いるのですが、たとえば、憲法第一条（天皇は、日本国の象徴であり、日本国
民統合の象徴であって、この地位は、主権の存する日本国民の総意に基づく）
とどう絡むかということも見えてくるわけですね。そのときに、国の物語を
しっかりと押さえないといけない。あとは、世界の物語というものが古事記上
巻に書かれている中身であったりするわけですから、そういうものを物語とし
て、自分の中で動かしてみるということですね。脳も、生活も、思考も、動か
してみると色々なものが見えてくるように思います。

言葉を使って自然に還る

今、環境との共生とよく言われていますが、人間にとって都合のよい環境で

はなく、自然と生きとし生けるものと共振・共鳴するということですね。他の生命存在というのは、ほとんどは自然に還っていくということが当たり前になっていますが、人間は自意識を持ったことによって、自我を確立はしたけれども、意識が散漫というか、バラバラになったというか。思考もそうですね。バラバラになっているわけですね。だからこそ、お祓いとか、鎮魂が必要ということなのですね。

つまり、自然に還る方法というのが祓いなんですね。ですから、自然に還るときに日本語を使って祓いをやるのが、少なくとも地上のそういう重力エネルギーを利用するとき役に立つというか、自然のその中に入り込むとき、同調しやすいんですね。重力に入り込みながら、回転、旋回をしているわけですね。それが今度は「知」に全部入り込まないで、反重力のように、地上に浮いても構わない、というか、そういうこと的前提がご修行なのです。

ですから、たぶん現代の科学の中でもそういう言葉が、木火土金水の五行もくかどこんすいごぎょうを調整してくれるのですね。それで空中を自在に動かせるということにつながっていくわけですね。言葉はもともと浮いて伝わっているわけです。重力が低いわけですね。そのアナロジー（類比）を使って、今度は言葉によって、反重力になって、その動きができるようになっていっているのですね。

お祓いをあげていくということは、自然とどこまで共振・共鳴していけるかと同時に、生きとし生けるものの中に入れるから環境もよくなっていく。それはたぶん白川の「おみち」しかなくて、世界にはないだろうと思います。人間と自然が対立している概念ではなく、人間が地から生まれて、そして地に還り、然るべき魂たまが天に還るという方法は「おみち」の他にはどうも見当たりません。世界では色々な瞑想が流行していますが、鎮魂以上の瞑想法はたぶんないだろうと思うんですね。言葉で自然と共振・共鳴していくことが可能になる道は、日本語の1万5000年の悠久の歴史の中で培った言葉こそができるということですね。